

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『失われた物語を求めてーキッチンテーブルの知恵』

レイチェル・ナオミ・リーメン (中央公論社)

興津 暁子

去年十一月初旬のある日、会員のHさんと久しぶりに会って食事を共にした。久しぶりだったので、色々な話をして盛り上がった。その中で、私の父が肺癌で治療をがんばっていること、Hさんのお父様は、昨年亡くなられたこと、そしてHさんは、お父様が亡くなる前にもっと沢山の話をすれば良かったと涙ぐんでおられた。私は、そうなのだけど・・・と考えていた。

後日、くまもとお話の交流会で、Hさんが遠慮がちに、「自分を慰めてくれた本だから、良かったら読んでね」と、この本を手渡してくれた。

作者のリーメンさんは、医学博士だが、大学では哲学を専攻し、その後医学部に進んで小児科医になるための訓練を受け、とても優秀な医師になり、やがては有名な医学病院の小児科部長への昇進が決まっていたのだが、彼女は大きな決断をし、辞退する。それまでに受けた医師としての訓練や医療制度のあり方に疑問を感じ、そのままでは先に進めないと考え、癌患者を対象とするカウンセラーとなり、その経験を綴ったのがこの本である。相談に来る人や、がんの専門医もレイチェルのキッチンテーブルをかこんで、困難な感情的な体験について語り合う。大きな窓のついた明るい空間で、丘や山々をながめながら、ここで人々は重い病気のことや、死が近づいていることなどを物語る。この本では、苦しみは「生きていること」にともなう普遍的な条件であり、苦しみにたいして感覚を麻痺させても、幸福にはなれない。苦しみを感じる部分と喜びを感じる部分はおなじであること。や、死は生の一部であること。死から逃れようとせず、死とちゃんと向かうことの大切さが書かれている。この本は、全米でベストセラーになったそうだが、それはたいがい、Hさんが私にくださった様に、勇気づけたい人に買って贈ることで多くの読者を得たとある。Hさんは、付箋に「お父様とのいとおしい時間をどうぞ大切に！」と書いて本の表紙を開けたところに貼って本を下さった。そうだな、出張から帰ったらお父さんと色々な話をしよう。恐れずに。(ミヤンマーにて) (特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 会員)